

● 制作

白頭翁の罅

：東京近郊におけるムクドリとの共存関係の風景計画

大木 翔生

園芸学部 緑地環境学科 環境造園学プログラム (主指導教員：霜田 亮祐)

OKI Sho

1. 研究の背景と目的

ムクドリは農村部で害虫を食べるなどのメリットから益鳥として捉えられていた。しかし農薬技術の発展などによってもたらされる利益は少なくなり、作物に対する被害の方が大きくなり害鳥として捉えられるようになり変化した。また近年では繁殖期を終えた夏から冬の間、群となり樹木などに集団で停まり形成されていた罅が、河畔林や屋敷林などから、駅周辺や住宅街の樹木に形成されるようになり、人の生活との距離が近くなったことで、糞害や騒音などの問題が発生するようになった。多くの自治体ではムクドリの嫌がる音を発生させるディストレスコールや、街路樹の強剪定によって対策を行なっているが、効果が一時的なものや、ムクドリが移動したとしても移動先で新たな問題が発生しているなど根本的な解決に至っていないことが多い。

本製作ではムクドリなどの鳥類が分断された都市生態系をつなぐ役割を持っているという点に着目しムクドリが引き起こす問題のランドスケープ的解決を目的とする。

2 調査と分析

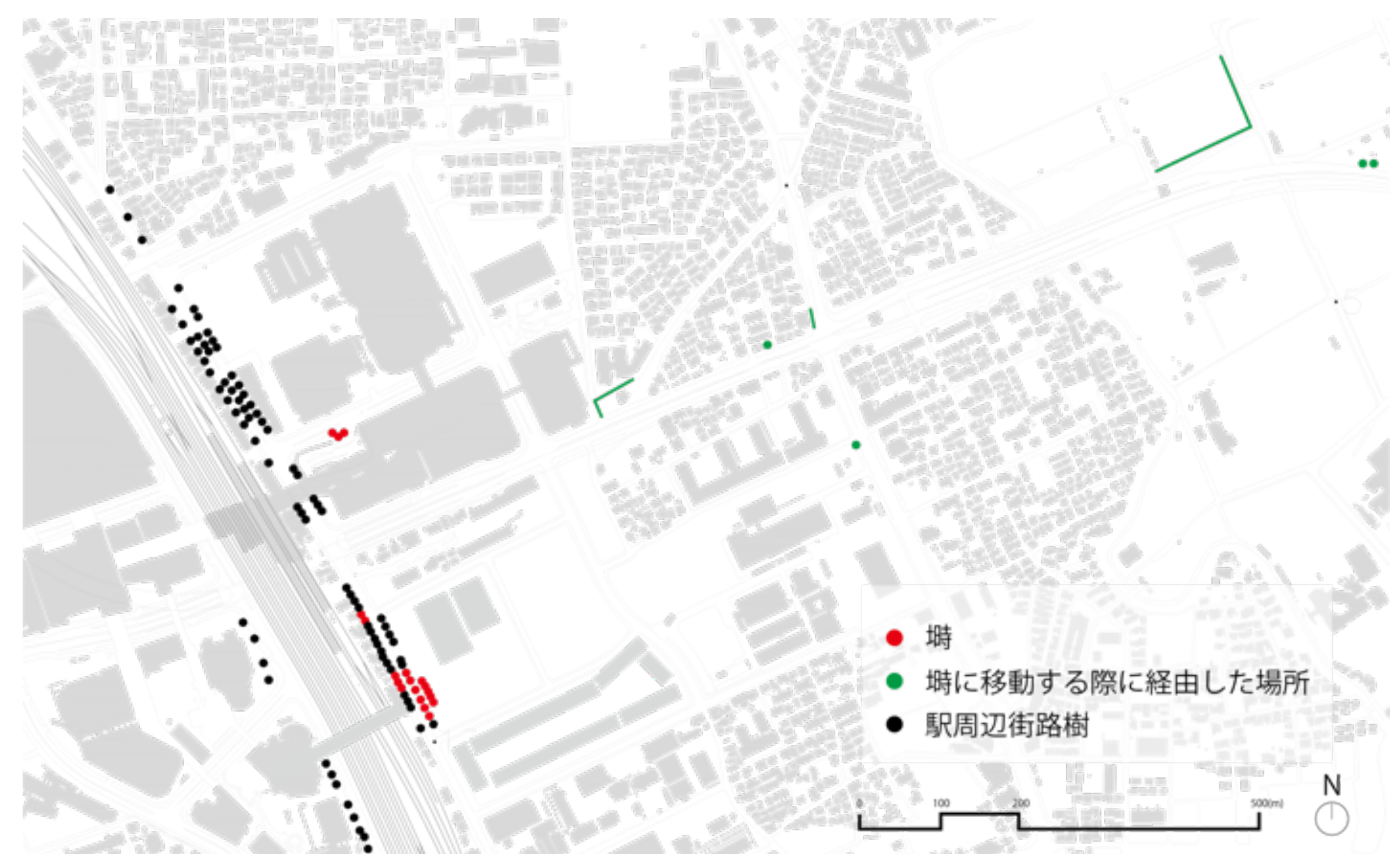
埼玉県内でムクドリの目撃情報をもとにさいたま新都心駅、本川越駅、東川口駅で調査を行なった。これらの地区で調査した際にムクドリが駅前広場、ロータリー、駐車場など、周辺が開けた場所に位置する樹木が罅の選定場所となっていることを確認した。

特にムクドリの数が多かったさいたま新都心駅で再度詳しく調査を行った。まずムクドリが罅に移動する際の行動を調査した。ムクドリは日中、畑や住宅街、公園川沿いなど広い範囲で餌を食べている姿が確認された。日没前になるとムクドリは集合を繰り返すことで群れを大きくしながらさいたま新都心駅周辺の街路樹へと移動を行う。罅の上空で旋回をくり返した後に一斉に罅へと停まり始める。

次にムクドリによる被害の実態を調査した。さいたま新都心駅では5月から11月の間、駅東側道路沿いの街路樹に罅が形成される。ねぐらが形成される場所の下には糞が落とされ場所には立ち入り禁止とされている場所もあった。ムクドリへの対策として対象が嫌がる音を発生させるディストレスコールや、街路樹の強剪定、木にネットをかけるなどの対策が行われていた。強剪定される前は罅として利用されていた

樹木が罅として利用されなくなっているなど効果を見ることができたが、ディストレスコールやネットに関しては対策が行われている樹木にムクドリが罅を形成しているなど効果を見ることができなかった。

罅となっている樹木の高さ、最も近い建物までの距離、空間の囲まれ具合を調査した。結果樹木の高さや最近の建物までの距離に関しては一貫した傾向を見ることはできなかったが、ムクドリは駅前通りの街路樹の中では空間的にひらけた場所に位置する樹木を罅として利用していると考察した。



3 提案

以上の調査を踏まえ、ムクドリが罅を形成している空間、罅に移動する過程で経由する空間をムクドリが集まることがメリットとなるような改変を行う。またムクドリが罅を設けやすい空間は人が多く集まり外敵が少なく開かれた空間であるという調査結果からムクドリが集まっても人の生活に影響を及ぼさない空間として駅のホーム屋根上の空間と高速道路が地下から地上に出る場所の防音壁の上に、河原を再現した空間を設けムクドリの罅の誘導を行う。またムクドリが都市生態系を繋ぐ役割を持っているということを実感してもらえるような空間になるよう設計を行う。

参考文献

- 1 大黒俊哉：都市域での就罅におけるムクドリの環境選好性 報告書 2015年2月
- 2 與那城千恵：市街地におけるムクドリの集団ねぐらと周辺環境との関係 ランドスケープ研究 (オンライン論文集) Vol. 13 (2020) P80-86

